

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第1種郵便物認可  
平成十五年九月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十卷第五号（通巻第一二三号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第113号

9. 2003

PDF制作

俳誌のsalon

操縦桿

品川鈴子

茄子の馬操縦桿でさきがけよ

吾<sup>あ</sup>もじわり皺む色艶茄子の馬

幸先の夢枕なり籐寝椅子

赤とんぼ葉草園を埒とし



日雇ひのさらふ病葉せせらぎに

吟行へ枝折戸出づるアロハシャツ

浅眠り月下美人を傍らに

ひとり占む月下美人も寝台も

寝室に月下美人のろくろ首

稿起す月下美人と差し向かひ



# 玉 鈴

香川 陶山 泰子

庵治石のどんと積まれし駐車場  
酒蔵に主の気配梅雨曇  
どの石が好きかと問いし四十雀  
つばくらめ黒で極め込む美大生  
庭園に残す足跡走り梅雨

香川 瀬口ゆみ子

陶工は多く語らず新茶汲む  
繰り言は聞き流されて冷奴  
蓮の葉や玉響ころり遊ばせる  
玉葱を束ね吊して鄙住まい  
妖艶な吐息を放つ月下美人

愛媛 武司 琴子

公園の蛇口上向く雲の峰  
蝮捕る八十路の翁の堅き腕  
万緑の中にますます小人めく  
無駄口の恥を重ねし梅雨の雷  
「ちよと待て」と歩を急ぐ吾に時鳥

# 吟

大阪 竹下 昭子

小五郎と云う名面白茄子の苗  
陽射しにも人にも酔うて花菖蒲  
時の日の眠る時計の語るもの  
漏刻の模型図に染み梅雨に入る  
口喧嘩うやむやとなる梅雨晴間

和歌山 田中嘉代子

母の日に届く百合の名はモナリザ  
川開き鶺鴒匠荒鶺鴒を抱いて来し  
鷺一羽昼の鶺鴒川の渦巻ける  
仏足石梅雨に法輪水浸し  
殺生をせぬと和尚は百足虫追ふ

大阪 谷 泰子

棕櫚の花ほぐれて母の三回忌  
ガレージの屋根に隣家のえご散華  
旧姓で呼びかけられる麦の秋  
パントマイム夏風邪に声奪はれて  
五十肩なだめすかして更衣

愛媛 筒井圭子朗

看視員鮎釣り鑑札見て廻る  
口細の瓶に蝮を絞り込む  
蛇捕の親指まむしの形して  
黒南風の沖不審船停泊す  
赤とんぼ宙で素早く掴まえる

兵庫 内藤 三男

練り歩くサンバのリズム走り梅雨  
今朝はもう塵と掃かれし芥子の花  
代掻きの水重なりて畦を越ゆ  
作業着にワイシャツ下ろす更衣  
父の日の己に宛てて打つメール

大阪 中島 霞

首蓆刈残されて円座めく  
職退きて耕す態も堂に入る  
校舎より響く笛の音早苗植う  
友抱え来し採りたての玉葱を  
てのひらの小銭数ふる薄暑かな

大阪 中田征二

泉州の水茄子裂きし夕餉かな  
人力車奨める車夫の汗疹かな  
斑猫に即かず離れず落柿舎へ  
小さきは庵青柿墓も又  
どくだみの花寝仏の衣かや

大阪 中田寿子

袋掛なぜか余りし袋かな  
けがれなき肘の少女や更衣  
レトロなりこきこきこきと扇風機  
花嫁の蕾ふくらむ薔薇ブーケ  
滴りを集めて刻む水時計

愛媛 永野秀峰

山寺の庫裡に毒消売が来る  
備前より氷づめせし鮎届く  
「昼寝禁ず」の貼紙がある無人駅  
参道の夜店の場所は変らざる  
ダム出来て百姓水を争はず

# 菓草歳時記

(一一二) 玉蜀黍(トウモロコシ)

## 三輪慶子

唐黍を焼く火のあつし祭店

山口波津女

焼きもちこしは本当においしい。夜店や観光地の賑わいに欠かせません。子供のまだ小さかった頃、出かけた先で、焼きもちこしの香につられて買い求め、子供達は早速かじりついたのですが、私は恐そうなお兄さんから値段を聞いてびつくり。あの時だけは味がしなかったこと、思い出します。

家庭菜園でも人気もので、必ず何本か植えられています。他家受粉ですので、ある程度群生しないと実りにくいのです。一列に五、六本では歯ぬけ状態になってしまうでしょう。又いつ挽ぐかという、収穫時の見極めも難しい。若めに挽いで甘さを楽しむか、しっかりと充実した味がよいか、各人の好みのわかれるところ。目安は包の先のひげの色で、初めはシルクのような手ざわりの真白なひげです。これは雌花の花柱で、受粉して実につれて茶色から黒くなります。こうなると包の中の実も充実して、さわっても手応えがあり、肩を張ったような立派な形になります。このあたりが食べ頃なのですが、飼料用、工業用にはもつと充実させます。

食べる事はさておき、薬用にはひげの部分を使います。ひげをむしり取って日干しにしたものを南蛮毛といい、煎じて内服します。利尿作用があり、むくみや、膀胱結石に用います。長沢元夫先生の解説(大日本百科事典)では受粉前の花柱を陰干しにするのとあります。受粉前と受粉後とどう違うのか、調べが行き届きませんでした。根にも茎葉にも利尿作用があり、茎葉には抗ガン作用のあることが報告されています。成分と薬理作用の關係ははつきりしません。欧米でもコーンシルクと云われて、利尿薬として単独で使われます。

ご存じのように、コーンブスによってアメリカからスペインにもたらされたイネ科の植物です。三〇年で全ヨーロッパに広がったと云いますから、とても優秀な穀物なのです。インド、中国を経て十六世紀に日本にも伝えられました。南蛮毛を利尿薬に使うのはオランダ医学によると云われます。

明治になってアメリカから優良品種が入ってきて、札幌の焼きもちこしはうまいなどと歳時記にも書かれることになったわけです。

食用部分にはビタミンEが多く、コーン油にはリノール酸が含まれ、血圧降下作用が期待できます。スイートコーンの他、デントコーン、ポップコーンなど、種類も多く、コーンスターチの利用範囲も思いがけず広いものです。たまたま今週は札幌に行きますので、北海道のとうもろこしを味わってきましょう。

参考文献 「中薬大辞典」

「世界薬用植物百科事典

著者略歴 神戸薬科大学卒

トウモロコシ (トウキビ、ナンバン)〔トウモロコシ属〕(イネ科)

*Zea mays* L. 玉蜀黍、唐蜀黍、Maize, Corn,

薬用部分

- ・雌花の花柱  
南蛮毛  
(ナンバンモウ)
- ・果実  
玉蜀黍子  
(ギョクシヨクシツシ)
- ・葉、茎、根



中田  
芳子画

芳子

古寺に唐黍を焚く暮日かな 与謝 蕪村

唐黍に背中うたるる湯あみ哉 正岡 子規

唐黍をつかみてゆるる大鴉 飯田 蛇笏

唐黍やほどろと枯るる日のにほひ 芥川龍之介

唐黍を焼く子の喧嘩きくもいや 杉田 久女

唐黍の影を横たふ舟路かな 水原秋桜子

唐黍を干していよいよ古庇 石田 波郷

唐黍の葉も横雲も吹き流れ 富安 風生

もろこしを食ぶる峠も阿蘇のうち 阿波野青畝

もろこしで髭をこしらえ鬼に化け 八木 紀子

くろつけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

をちこちを飛びかつ啼けりほととぎす 大阪 武田ともこ

薄暑光腰高の娘のハイヒール

山法師甘樫丘に正午の鐘

羅の巫女が先導婚の列

上り築川にエプロンかけるごと 大阪 河村 泰子

立膝で夏炬を囲む築守ら

梅雨容赦なき白干しの扇骨に

扇骨を削り汗ばむ座舩舩 愛媛 真鍋 瀧子

田植機の孫が大将農を継ぐ

村名を鉦山やまに戻して半夏生

月遅れ村の庄屋の古幟

万緑の中鎖されし坑道しきの口 兵庫 川合まさお

楠若葉猫の寝ている行者道

子雀の兄弟残し園閉じる

「ほら似合ふ」と母に買つてる夏帽子

菖蒲湯を知らぬ子供こどもの背な流す

鎖り場の岩ぬめぬめと走り梅雨 奈良 林 とみお

峰入りや胆坐りたり谷覗き

樹々若葉女人高野の塔包み

鯉幟宇陀も吉野も二つ三つ

どくだみの白に誘はれ入る町家 兵庫 明石 文子

庚申堂踵をかえす夏帽子

飛鳥路を目高と共に歩をすゝめ

葉桜の枝垂るる今も祇園女御

茄子の色出せずカンヴァス塗りたくる 兵庫 片山八重子

夏羽織姫様ごっこの子供達

余花の下笹舟浮かべ祖父と孫

山芋を摺つて摺つてまどひをり

忌の庭の闇の深さよ花みかん 愛媛 垂水イツ子

吾が歳と変はらぬ樹齡袋掛け

夕闇の村すっぽりと栗咲く香

歩道まで迫り出してゐる花茨

冷素麵好む夫との五十年 愛媛 山内栄美子

言の葉に悔残る日や梅雨しとど

野良猫のさつと横切る梅雨の月  
午前四時シャッター明ける燕の巢

兵庫

北川 詠子

苞開く山法師をも並木とし  
忘れものせしこと忘れ蛇の殻  
髭おとし若返る医師風薫る  
慌てても句は作られず苺食ぶ

兵庫

内山 芳子

卒寿なほ田植の差配気にかかり  
梅雨ごもりジグソーパズルに姑夢中  
姑の縫ふ浴衣は最後かも知れず  
水着干す膝の癒ゆるを信じつつ

兵庫

小川 寿照

我が道と一人遍路の峠越え  
流行に疎きも救い更衣  
初つばめ地蔵に挨拶宙返り

香川

島内 美佳

爺ちゃんと呼ばれて祝う父の日よ  
木下闇いざ入場の刻を待つ  
新人もエプロンつけて若葉風  
彫石の穴で寛ぐてんとむし

福井

木曾 鈴子

黄金に大地を染めて麦の秋  
紫陽花を一芽失敬故山去る  
沙羅の供花高枝鉢伸ばしきり  
頭に粋な立縞柄よ浦島草

戸の全て外す離宮に風涼し

兵庫

長崎 豊子

青梅雨に鑑真和上朱の唇  
動くものみな新樹なり風渡る  
セルを着て髪美しき風呂上り  
一束ねして菖蒲湯は男の香

トロント

恩塚典子

父母の亡き国思ふ夏の雲  
そよ風のところすなはち蚊天国  
波引きし初夏のエリー湖人は無く

埼玉

岡田 章子

永平寺素足の僧に案内され  
水鉢に一花を上ぐる未草  
公園の遊具に群れる夏帽子

蚕豆の塩茹でかげん控へ目に  
新緑の峠を越えて谷川岳へ

小田

知人

遭難のレリーフ霧の登山口  
椎葉落ち湯面に浮ぶ露天風呂

犀川に長き旧交麦の秋

中村

和江

蜘蛛の囿にたじろぐ昔生物班  
夕河岸や水量を増す水車三つ  
湯の宿は和洋折衷夏の月  
畔刈れば蛇水田を走りけり

松木

清川

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句〜十五句 勝野 薫 //

\* 選句は全て 品川鈴子

薄暑光腰高の娘のハイヒール

武田ともこ

和服離れの世代は栄養にも恵まれ、生活様式が殆ど椅子に変わった所為か、娘達の下半身は引き締まり、すらりと脚長で腰の位置が西洋人並みに高くなった。その肢体を高い踵に載せて闊歩する。しかも薄暑に軽装して、見る目にも眩しいばかりの若さ。

扇骨を削り汗ばむ座胼胝

河村 泰子

伝統の手仕事を受け継ぎ、汗ばみながら扇の骨になる竹を黙々と削る。職人の手元からふと足へ眼を移すと、節くれだつ座り胼胝。技の修行の厳しさが、そこに凝り固まるかのように。

田植機の孫が大將農を継ぐ

真鍋 灌子

農業は機械化により肉体の労苦が減った代わりに、機械の使いこなしや経済的な遣り繰り等、高齢者だけでは難しくなった。そこで頼もしい若手の孫に全てを任せる。家業

を継いでくれる孫こそ御大將。

菖蒲湯を知らぬ子供の背な流す

川合まさお

ほのぼのとした親子の姿が目につかぶ。菖蒲湯には蓬も一緒に束ねて入れる。浴後の爽やかさはまた格別。尚武に通じる語呂合わせから江戸の頃より子供達が菖蒲の葉を束ねた太刀を腰に差したり、これで地面を叩いて音の大きさを競ったりしたそうだ。なお菖蒲はサトイモ科の植物だが知名度の高い花菖蒲はアヤメ科で全く別種。

樹々若葉女人高野の塔包み

林 とみお

新緑に映える五層の塔の荘厳で清々しい様子が活写されている。台風で大損傷を受けたが今では天平時代の優雅な姿に修復。特徴のある相輪（九輪の上に宝瓶を載せ宝鐸を吊り巡らした）は他に類が無く、勾配が緩く軒の出の深い屋根は朱塗り柱や白壁と絶妙のコントラストを保つ。誰しも一度は仰ぎ見たい塔。（以下略）